

ニュースを疑え

社会を根底から揺るがす新型コロナウイルスのパンデミック。世界各地で感染症対策に取り組んできた山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授は「ウイルスは倒すべき敵ではなく、共存する相手だ」と話す。ウイルスの遺伝子が哺乳類の進化に深くかかわるなど、時間軸を変えれば全く違う側面が見えてくるという。

(聞き手 坂本英彰)

山本太郎さん (56)

長崎大熱帯医学研究所教授

ウイルスは人類進化に関与 根絶より共存する相手へ

疑え

免疫を持った社会は強い

「野生動物を宿主としていたウイルスがなぜ、あるとき人間に感染して感染症を引き起こすのですか」

「種を超えた感染はウイルスにも大きな負担を強いるため、通常ならその可能性は低い。エイズウイルスも何万年とアフリカミドリザルを自然宿主として共生し、しかもアフリカミドリザルにエイズを発症させることはなかった。種を超えた感染が起きるのは、本来の宿主でウイルスの存在が脅かされたため、と考えられるかもしれません。近年ウイルス感染症の出現が多いのは、野生動物がすみ環境が開発や地球温暖化などで厳しくなっていることも関係しているでしょう」

——人と人の接触で感染する

など、ウイルスは人間の弱みを突いてくるようです

「ウイルスが弱みを突くのではなく、むしろわたしたちの社会が流行するウイルスを選ぶのだと思います。社会の特徴が流行するウイルスを決める。仮に人口がはるかに少ない1000年前の社会だと、今回のような人の密集で感染が急拡大するウイルスは流行しにくいのです」

「がんや心筋梗塞といった病気に違い、ウイルスによる感染症の拡大は人と人の接触やネットワークといった要因に左右される。感染症は社会的な病気といえるでしょう。ウイルス拡散の抑制にしても、自分ひとりの努力ではどうにもならない部分があります」

——社会全体を巻き込む戦争のようでもあります

「欧米指導者らは「見えない敵との戦い」な

疑え

新型コロナウイルス
弱毒化待つ

「卵生から胎生へという哺乳類の大進化に、ウイルスが関与したということですね。それは驚きです」

「ウイルスは宿主つまり感染する生物がないと生存できません。だから最終的には、宿主と安定した関係を築くことがウイルスにとっても有利なわけです。さらに宿主が環境適応性を高めて生存率を高める方向に、ウイルスが働きかけている可能性もあります」

やまもと・たろう 長崎大熱帯医学研究所教授。昭和39年3月、広島県生まれ。長崎大医学部卒。京都大医学研究科助教授、外務省国際協力局課長補佐などを経て現職。医学博士。専門は国際保健学、熱帯感染症学。アフリカや中米ハイチで感染症対策に従事。

どと表現しました

「戦争に例えるのはどうでしょう。ウイルスを消滅させることが勝利だとすれば、恐らくいつまでも勝利はないでしょう。むしろウイルスとはつきあひ、共存していく相手だと考えたほうがいいと思います」

「20世紀なかば、医学や公衆衛生の進歩で人類は感染症との戦いに勝利しつつあるといった楽観論が広がったことがありました。世界保健機関(WHO)は天然痘ウイルスの撲滅に取り組み、1980年に根絶を宣言した。ところがその後、エイズやエボラ出血熱といった新しいウイルス感染症が明らかにになりました」

——とはいえウイルスは感染症を引き起こす。共存とはどういうことですか



インタビューはオンラインで行った

「現生人類が持つ遺伝子には、遠い祖先が感染したウイルスに由来するものが多くあります。環境に適応して自然淘汰を生き抜いてくるために、ウイルスが移した遺伝子も大きな役割を果たしたといえるでしょう」

——目の前にある新型コロナウイルスとは、どうつきあっていけばいいのですか

「人と人の距離を取るなどの対策で可能な限り感染速度を遅くし、最終的に7割ぐらいが感染して免疫を持てば集団としての免疫がついたといえます。感染速度を遅くするのは、医療システムを維持してワクチンや治療薬開発の時間を稼ぐため。より重要なのはウイルスを弱毒化させることです。ウイルスの毒性は固有ではなく変化する。感染速度が遅くなればなるほど、感染者を短期間で死なせて自らも消滅する強毒ウイルスは生存が厳しくなるのです」

——また新たなウイルスによるパンデミックが起きないとは限りません。私たちはそれに備



(提供写真)



「ウイルスと人間の関係は、時間軸によって異なります。100年や1000年単位で見ると、ウイルスを取り込んで免疫を持った社会は強靱になる。現代の人類が地球上のさまざまな土地に行けるのは、多様な感染症にかかって免疫を持っているからなのです」

「もっと長い尺度、何千万年という単位でみると、ウイルスは進化の原動力にもなっています。哺乳動物の子宮内にある胎盤は、遠い祖先が感染したウイルスが残した遺伝子の働きでつくられたとされる。胎盤はウイルスが感染するために持つ免疫抑制能力を受け継ぎ、胎児を異物として拒もうとする母体の働きを抑えているといわれるのです」

えた社会づくりをすべきなのではないでしょうか

「それはすごく難しい質問です。今回の新型コロナを想定して最適の予防を講じた社会をつくったとしても、ウイルスが少し違おうと対応できなくなる。最善は次の不適応を用意してしまおう。社会のあり方が変われば、異なるウイルスを選び取ってしまふのですから。心地よくはないが、次善のなかで適応を模索するしかないのだと思います」

取材後記

「母なるウイルス」なのか

ウイルスがなければ人類もなかった、ということなのだろう。胎盤の形成はウイルスに由来するといふ。遠い祖先が原因となるウイルスに感染していなかったら、進化はどんな道をたどったのか。卵生動物が支配する世界—SF的な想像図も浮かぶ。はるかな時間軸は、敵や共生といった次元を超越する。コペルニクス的な思考の転換を迫られた。母なるウイルス。思いがけない言葉が口をつく。

「教科書を信じない」「自分の頭で考える」。ノーベル賞受賞者はそう語ります。ではニュースから真実を見極めるにはどうすればいいか。「疑い」をキーワードに各界の論客に時事問題を独自の視点で斬ってもらい、考えるヒントを探る企画です。

真実はどこに—
「達人」はこう見る

疑え

ウェブサイト・産経ニュースにインタビュー全文を掲載しています。「戦後75年」など違うテーマで他の論客にも聞いています。

THE
SANKEI
NEWS
産経
新聞